別表５
⑶

主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	塩田　藍

主 論 文 題 名：地域在住精神障害者の Community integration に関する研究

【背景と目的】

日本では精神障害者に関して，入院治療から地域生活への移行の必要が指摘され，そのための施策がなされてきた．しかし，長期入院患者の地域移行や地域定着は十分には実現していない．したがって，精神科病院における退院促進と同時に，地域生活環境の整備が課題である．

“CI: Community integration”とは，地域生活における適合，サポートの認識，充実感，自立という主観的な要素が融合した概念であり，精神障害者の「地域社会共生感」を表す．欧米では精神障害者の地域生活における目標の一つとして掲げられているが，日本では CI 概念そのものが用いられていない．本研究の目的は，CI の先行研究を整理し，概念の定義を行い，測定するための尺度開発を行い，地域在住精神障害者における CI の実態を明らかにすることである．

【第 1 章　精神障害者における Community integration の研究動向】

精神障害者における CI の概念や要因，研究動向を整理し，今後の課題について明らかにすることを目的に，国内外の先行研究のレビューを行った．

その結果，課題として以下の 5 点が明らかになった．①CI 概念の定義がなされていないまま用いられている．②CI 概念の構成要素は，主観的要素と客観的要素に分類される．CI を単次元概念とする場合は主観的要素のみで構成され，多次元概念とした際には主観的要素と客観的要素で構成されるが，客観的要素は CI の要因とされる内容と重複している．③CI の測定に際して信頼性と妥当性を有する尺度の利用は少ない．④CI の要因は臨床的な観点が中心で，生活実態が反映されていない．⑤要因間の関連を検討している研究は見当たらない．

精神障害者の CI に関する研究は国際的な広がりがみられ，重要性を増しているテーマであり，日本において実証研究に基づく知見を得ることの必要性が示唆された．

【第 2 章　日本語版 Community Integration Measure の開発】

本研究では CI を主観的要素で構成される単次元概念と定義し議論を進める．第 2 章では地域在住精神障害者の CI を測定する尺度の開発を目的に，海外の地域在住精神障害者に使用されている尺度 CIM: Community Integration Measure の日本語版を開発し，その信頼性と妥当性を検証した．尺度開発の手順に基づき，原著者の許可を得た後，原版を翻訳し，精神障害者や精神保健等の専門家による翻訳内容の確認を経て，地域在住精神障害者 263 名に調査を行った．

主　論　文　要　旨

この結果から，日本語版 CIM は原版と同様に一因子構造の信頼性と妥当性を有する尺度であり，地域在住精神障害者の CI の測定が可能であることが検証された．また CI はソーシャルネットワークのサイズと有意に相関があり，ソーシャルネットワークは地域在住精神障害者の CI を論じる際に有用な要因であることが示唆された．

【第 3 章　地域在住精神障害者の生活実態に基づく支援の類型化】

症状や機能が類似しているように見える地域在住精神障害者集団であっても，生活実態と支援の必要性からみれば多様な集団で構成されていると考えられる．第 3 章では地域在住精神障害者の生活実態に基づく特徴と支援の必要性を明らかにすることを目的に，潜在クラスモデルを用いて探索的に類型化を行った．

この結果から，地域在住精神障害者は，基本属性，サービス制度利用，CI，ソーシャルワーク，地域生活自己効力感等による生活実態により類型化され，分類した上で支援を提案することが重要であることが示された．さらに CI の評価がもっとも高い類型と他の類型では，ソーシャルネットワークのサイズが有意に異なることから，ソーシャルネットワークは地域在住精神障害者を層別するために有用な属性であることが示唆された．

【第 4 章　地域在住精神障害者における Community integration の要因の検証】

第 1 章から第 3 章の結果を踏まえ，第 4 章では CI の実態を明らかにすることを目的に，地域在住精神障害者を層別した上で，CI の因果モデルと構造モデルを検証した．

決定木分析の結果，地域在住精神障害者はソーシャルネットワークのサイズで示される社会的孤立傾向で層別された．多母集団同時分析の結果，因果モデルでは共通するパスや固有のパスが見出された．層ごとの重回帰分析の結果，構造モデルでは共通する要因や固有の要因が見出された．以上より社会的孤立傾向により CI の因果モデルと構造モデルは異なることが検証された．社会的孤立傾向の低い群においては，家族や友人によるソーシャルネットワークを基盤とし，インフォーマルケアを活用する支援の有用性が示唆された．社会的孤立傾向の高い群では，精神障害者自身で管理せざるを得ない生活行動をアセスメントし，フォーマルケアを活用する支援の必要性が示唆された．

【総括】

第 1 章では CI 研究の現状と先行研究の課題が明確になり，第 2 章では CI を測定するための日本語版尺度を開発し，第 3 章では対象集団が異なる特徴をもつ集合体であることを示し，第 4 章では対象者を社会的孤立傾向で層別した上で，因果モデルより CI と要因間の関連を見出し，構造モデルより CI に影響する要因を見出した．

本研究によって，地域在住精神障害者における CI の実態が明らかになり，CI 向上のための支援への示唆が得られた．